

[連載]

## 技術教育研究会と私の歩み

2

佐々木 享

### 原正敏先生との出会い

私が初めて参加した東京都教連の1959年11月の教研集会の分科会には、いま考えても珍しいくらい、豪華な人びとが集まっていた。講師(今日の共同研究者)には、戦前から技術論、技術史の研究者として知られた岡邦雄氏、新進気鋭の哲学者芝田進午氏(当時法政大学)がおり、傍聴者として長谷川淳氏(当時東京工業大学)が参加していた。報告者の中には、原正敏、池上正道らの名前があった。(この中で以前から面識があったのは、都立大学の同窓生である池上正道氏だけであった。)

当時都立世田谷工業高校の定時制に勤めていた原正敏氏の報告書は『職業訓練と学校教育』と題し、1958年に職業訓練法が成立したことを契機に、財界が職業訓練に関心をもつようになったが、最近では青年労働者も関心を深めているので、日本の労働組合運動も職業訓練に積極的に取り組むべきだ、という趣旨のものだった。この方面の知識が皆無だった私には、衝撃的な報告だった。この集会は一生忘れられない原正敏先生との最初の出会いの場だった。当時の東京都教連の教研集会では報告者も全員合宿しており、原正敏先生はウイスキーの角壇を下げて、私の宿舎であった日本青年館まで訪ねて下さった(後にわかったことだが、当時の原先生は、平生は焼酎を飲んでおられた)。その夜、私と原正

敏先生とは技術教育や職業教育に関する考え方で意気投合したので、心ゆくまで歓談した。私の主張は当時の教職員組合のなかでは孤立している感があったので、同志がいることを知って本当に嬉しかった。

長谷川淳先生に初めてお目にかかったのもこの集会で、集会の後、懇談したことを契機に先生に近しくして頂くことになった。

しかし万事が順調だったわけではなかった。中野公会堂で開かれた全体集会では、技術科はもちろん、働く者に対する技術教育を重視する必要があると主張した私の発言に対して、いまの発言は教育課程の改悪に賛成するもので、資本家たちに利用される危険があるから反対だとう発言があった。

この1959年の暮れの偶然の機会に店頭で雑誌『教育』を手に取り、中内敏夫氏の論文を見た。これを通してそれまで全く関心を持たなかった教育学者にも学ぶに値する人たちがいることを知った。

### 技術教育研究会の創立

技術教育研究会の創立の集会は、長谷川淳、山崎俊雄、原正敏の3氏の呼びかけによりそれから間もない1960年1月15日の成人の日、目白にあった公立学校教職員共済組合の合宿所で開かれた。参加したのは、『会報』第1号(1960.2.1)によると呼び掛け人を含めて20人だった。こうして技術教育研究会は

うぶ声をあげた。開催にいたる経緯は、原正敏先生の連載記事に詳しいので省略する。技教研は、この年は毎月1回計12回の例会を開催した。報告のテーマは、技術科や高校の工業科に限らず、歴史的な研究を含めて幅広く設定されたから、私はほとんど毎回出席して少しずつ視野を広めた。報告された内容の要旨が次の『会報』に掲載されるしくみだった。テーマの選択、報告者との交渉、会場の設定などは専ら原正敏氏の尽力によって過言でない。5月の例会で、それまで未定だった年会費が400円と決められた。毎回、参加者は数名程度で、10名を超えることは滅多になかった。しかし私は、この技術教育研究会の創立に加わる機会に恵まれて、漸く技術教育研究に対する関心を深めるようになった。

### 技術教育研究会の創立の呼びかけ人

呼びかけ人に名を連ねたのは3名だが、そのイニシアティブをとったのが原正敏先生だったことは明らかだった。

他の2名について若干の説明を加える。長谷川淳先生は、1912年8月生まれだから当時48歳で、東京工業大学の助教授であった。先生は、1994年に亡くなられた後に編集された『かわりびょうぶ——長谷川淳先生追悼記念誌』(1996年)に記載された略年譜によると、弘前高校から東京帝国大学工学部を経て、それぞれ短期間企画院、技術院、都立航空工業専門学校に勤められた後、1944年から1957年まで文部省に勤められ、1955年に東京工業大学に赴任された。(？としたのは、略年譜には文部省を退職した年月の記載がないからである。)先生は、文部省に在職した頃から一貫して技術教育の行政に携わるなど、

当時の日本における数少ない技術教育の専門家であった。当時東大教授をしていた細谷俊夫氏は戦前から教育学者として技術教育に詳しい学者であったが、技術教育の内容や方法にまで立ち入って発言できる人となると、長谷川淳先生の右にでる者はなかったといえる。後の1970年8月に技術教育研究会の規約が整備された際に、その初代の代表委員となっていた。

山崎俊雄先生は、1916年生まれだから、当時は多分45歳で、東京工業大学の助手をしておられた。長岡高等工業学校を卒業してから種々の苦勞をされ、戦後の早い時期に東京工業大学の助手となられ、一貫して技術史を研究して来られた。先生は、後には、国立大学で技術史を専門的に担当する最初の教官となられたが、当時は現在とは違って「技術史」を講座とする大学がなかったことはもちろんのこと、講義科目となることすら極めて珍しい時期だったから、いわゆる下積みの時代を長く過ごされ、研究の他に学会の実務などを淡々と務めておられた。(のちの人は、東京工業大学、広島大学、阪南大学の教授を経られ、日本科学史学会の会長、産業考古学会の会長を歴任されたことのほうが、よく知られているかも知れない。最近、木本忠昭氏が丁寧に編集した山崎俊雄『日本技術史・産業考古学研究論——山崎俊雄技術史研究論集』(水曜社、1997年)が刊行された。)

原正敏先生が当時は都立工業高校の教員をされていたことは、前述した。その原正敏先生が後に現代日本の数少ない技術教育、職業教育の専門研究者になられ、また長谷川淳先生の後を継いで技術教育研究会の第2代目の代表委員になられたことは、周知のとおりである。(原正敏先生については、後に詳しく紹介する。)